

特集：招待論文

グローバル人材育成に資する国際バカロレア：
ディプロマプログラムを中心に赤塚 祐哉^AInternational Baccalaureate to Fostering Global
Citizens: Focusing on the Diploma ProgrammeYuya Akatsuka^A

Keywords: global leaders, International Baccalaureate, Diploma Programme

1. はじめに

「究極のアクティブ・ラーニング」とも言える国際バカロレア機構 (International Baccalaureate®、以下 IB と略記) が提供するプログラムが国内の地方自治体や高等学校で注目を集めるようになってきた。とりわけ、大学入試との接続の観点やグローバル人材育成の観点から高等学校段階における IB のプログラム「ディプロマプログラム (Diploma Programme、以下 DP と略記)」が注目され、その教育手法を参考とした授業を展開したい教員は多いと考えられる。

現在、グローバル人材育成は日本における国家的な教育課題と考えられ、グローバル化が進む国際社会で積極的に活躍できる人材育成が求められている。文部科学省は、高等学校段階から国際社会をリードする人材を育成する教育を充実させるよう、IB の DP 認定校等を 2020 年までに 200 校に増やす計画を進めている¹⁾。これまで、国内の DP 認定校 26 校のほとんどがインターナショナルスクールであり、学校教育法第 1 条に定める高等学校 (以下、「1 条校」と略記) の認定校はわずか 12 校であった (2016 年 6 月 1 日現在)。

一方、近年は 1 条校でも DP を導入する方針を決定しており、認定取得に向けて具体的に取り組んでいる高等学校が複数ある。大学においても、教育再生実行会議第四次提言 (2013 年 10 月 31 日) を受け、入学選抜で DP の資格や成績を積極的に活用されるようになってきている。こうした背景から、IB が提供するプログラムへの関心が急速に高まっているにも関わらず、

IB 及び DP についての国民的理解は十分とは言えない。そこで本稿では、グローバル人材育成に資するとされる IB のプログラムについて、DP を中心にその概要、教育理念、教育手法及び評価を解説する。

2. IB のプログラム概要

IB は 1968 年発足の民間の非営利教育団体で、本部はスイスのジュネーブにある。日本はシンガポールにあるアジア太平洋事務局に所属している。IB は、多くの国の政府機関、財団及びユネスコ等から協力を得て活動を行っている。IB 設立当時の趣旨は、国際的な移動を余儀なくされる生徒達を対象とし、「国際的に認められる大学入学資格 (国際バカロレア資格) を与え、大学進学へのルートを確保するとともに、学生の柔軟な知性の育成と国際理解教育の促進に資すること」²⁾であった。また、IB 設立当初は、IB のプログラムを提供する機関の大多数はインターナショナルスクールであったものの、現在はインターナショナルスクールのみならず、様々な国や地域の公立・私立学校で IB のプログラムが導入され、実践されている。IB は、IB 認定校を目指す学校への助言・審査・認定やカリキュラム、評価の開発、IB 主催のワークショップ等を通じた指導者の訓練及び学校間のネットワーク作り等といった取組を行っている。

なお、表 1 の通り、IB は年齢に応じ、以下の 4 つのプログラムを提供している。

^A 早稲田大学本庄高等学院

表 1 IB の 4 つのプログラム (International Baccalaureate. (n. d.) より作成) ³⁾

プログラム名	対象年齢	日本の該当学年・対象
Primary Years Programme (PYP) 初等教育プログラム	3～12 歳	幼稚園・保育園から小学 6 年生まで
Middle Years Programme (MYP) 中等教育プログラム	11～16 歳	小学 6 年から高等学校 1 年生まで
Diploma Programme (DP) ディプロマ・プログラム	16～19 歳	大学進学を目指す高等学校 2・3 年生
Career-related Programme (CP) キャリア関連プログラム	16～19 歳	専門学校等を目指す高等学校 2・3 年生

なお、2016 年 6 月現在、IB 認定校は全世界で 4,569 校、日本国内で 37 校が登録されている。

2.1 IB の理念と学習者像

IB は「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」(p. 3) ⁴⁾を「IB の使命」(IB mission statement)に掲げ、IB の全プログラム (PYP、MYP、DP 及び CP) で具現化するように定義している。また、IB では IB の使命を IB のプログラムを実施する上で最も大切な教育理念として位置付け、この理念を実現するための学習者としてあるべき姿を「IB 学習者像」(IB Learner Profile)として示している(表 2)。IB で学ぶ児童・生徒、IB を指導する教師のみならず、保護者や教育委員会・理事会等、学校に関わる全ての人が学校生活全体をとおして実現していく目標であるとしている。

なお、この学習者像はすべての教科・科目を通し、常に意識しながら学習を進めるようになっている。

表 2 IB 学習者像 (International Baccalaureate Organization. (2014a, p. 3)より引用) ⁴⁾

探究する人	私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。
知識のある人	私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。
考える人	私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。
コミュニケーションができる人	私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。
信念をもつ人	私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。
心を開く人	私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見だし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人	私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。
挑戦する人	私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探求します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。
バランスのとれた人	私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。
振り返りができる人	私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

グローバル人材育成に資する IB のプログラムは「知識やスキルの習得をこえたところにある『全人的』な教育を目指すもの」(p. 8) 4)であり、IB 学習者像からも全人教育を本質としていることが分かる。筆者がこれまで視察した国内外の複数の認定校でも例外なく学習指導案 (Unit Planner) 中に、どの学習者像に焦点を当てて指導するのかを教師は明記していた。同時に、学習者である生徒たちも学習者像を意識して、授業内で具現化できるよう工夫していたのが特徴であった。

2.2 IBにおける学習

IB は、全てのプログラム及び全教科・科目を通して、批評的 (クリティカル) で創造的な力を伸ばすよう、指導者に求めている 5)。また、知識をどの程度覚えさ

せるのかではなく、知識をどのように活用するのか、について主眼が置かれている 5)。

昨今、「グローバル化」という言葉が多く使われているが、グローバル化に対応するためには、生徒がクリティカルに考え、主体的に学習する力を身につけられるような教育が重要である。

IB の教育方針では、全教科・科目で横断的かつ同時並行的に、概念の理解と物事を探究することが重要だとしている 5)。さらに、IB では、教育の目標は知識の獲得ではなく、多様な考え方で発揮できる知力を育成することだ、としている 4)。この IB が主張する知力の育成のプロセスにおいて、特に文部科学省が目指す人材育成の考え方に親和性があると感じている。

なお、文部科学省の「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」では、「今なお多くの学校において、学力についての認識が『何かを知っていること』にとどまりがちであり、知っていることを活用して『何かをできるようになること』にまで発展していない」 7) (p. 1) と指摘している。この指摘は国内の学校教育全体のことを指摘しているものであるが、グローバル人材の育成を目指した授業実践でも大いに参考となる指摘ではないだろうか。

2.3 学習の方法 (Approaches to learning: ATL)

IB では、全プログラム及び全教科・科目を通して批評的 (クリティカル) で創造的な力を伸ばすため、学習の方法 (Approaches to learning : ATL) を児童・生徒の発達段階に応じて指導するものとしている。

ATL の指導を行う上で重要なこととして、

- ①現実社会の諸課題を取扱うこと
 - ②概念理解と探究活動を促進するよう生徒中心の学習形態をとること
 - ③生徒の感情知性とメタ認知能力 (affective and metacognitive skills) を高めること
- を目的としなければならないとしている 4)。そのためには、教師は生徒に協働学習や、自己の学習の振り返りを行うことの重要性を指導することが大切であるとしている。

今後の後期中等教育の方向性として、文部科学省の「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」では、生徒のメタ認知能力の育成を重要な課題の 1 つとしており 6)、今後の後

期中等教育課程におけるグローバル人材育成については、ATLの考え方が果たす役割は大きい。

IBでは、ATLを高める手法として、

- ①思考力 (thinking skills)
- ②コミュニケーション能力 (communication skills)
- ③ソーシャルスキル (social skills)
- ④自己マネジメント力 (self-management skills)
- ⑤リサーチ力 (research skills)

の5つの力を育成するとしている⁷⁾。これらの5つの内容は独立して教えるのではなく、それぞれが相互に連携し合って活用されるよう指導すべきであるとしていることも特徴である (図1)。

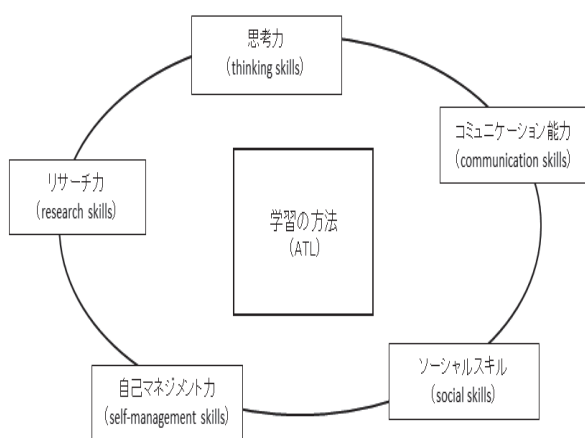


図1 ATLの5つのスキルの統合

例えば、高等学校外国語（英語）の授業で実践する一例として、「言語や文化に関する知識・理解」の力を伸長させる探究活動として「言語習得と個々人のアイデンティティの維持にはどのような関連性があるのか」というテーマで学習を行うとする。その際、学内の図書館等で第二言語習得に関する文献や人種的マイノリティの人たちが言語を修得する上で感じる課題等を調べ（リサーチ力：research skills）、論述する際には、個人の経験等に基づき、論を展開するよう指定し（思考力：thinking skill）、論述形式で300語程度の課題提出をするといった学習活動が考えられる（コミュニケーション能力：communication skills）。

2.4 DPの概要

DPは16～19歳の生徒を対象とした2年間のプログラムである。日本の1条校で実施する場合、高等学校の2年生及び3年生で実施されることが多い。最終

試験は5月または11月（日本の1条校の場合は3年生の11月）に実施され、最終試験を受け、所定の成績を修めることにより「ディプロマ」が取得できる。

DPは思いやりをもち、分析的に考えることができ、生涯を通して学習に励み、責任感のある良き社会の一員となるよう、プログラムが構成されている。生徒がこれまでに得た知識や経験を生かしながら学習を深め、教師と生徒、生徒同士が双方向で議論を深めたり、討論を実施したりしながら課題解決に向けた探究型の授業を特徴としている。

なお、DPでは、「IBの学習者像」を中心とし、生徒は3つのコアと呼ばれる科目と6つのグループと呼ばれる教科を2年間かけて学習する。図2はディプロマプログラム（DP）の構成図である。



図2 ディプロマプログラムの構成図（国際バカロレア. (2014a, p. 5). より引用)⁴⁾

2.4.1 3つのコア

① 課題論文 (Extended Essay, EE)

課題論文では、それぞれのグループに設置されている科目に関連した研究課題を設定し、自ら調査・研究を行い、論文としてまとめる。論文は英語で4,000語程度（日本語の場合は8,000字程度）で行い、大学で求められるリサーチ技術やライティング能力を身に付けることを目的としている。2年間にわたって、最低40時間以上の取組が求められる。

② 知の理論 (Theory of Knowledge, TOK)

教科横断的な観点から、物事を論理的かつ客観的に

捉える批判的思考力（クリティカル・シンキング）を養うことを目的とし、知識の本質を探究する。さらに、言語や文化及び伝統といった多様性を理解したり尊重したりすることを通して、国際理解を深めることができるようにする。2年間にわたって、100時間以上の学習を行う。

③ 創造性・活動・奉仕 (Creativity, Activity, Service, CAS)

教室外における学習を通して、協調性や思いやり、行動することの大切さを学ぶ科目である。次の3つの要素で構成されている。

- ・創造性 (creativity) : 芸術などの創造的な活動
- ・活動 (activity) : スポーツ等の身体的活動
- ・奉仕 (service) : 無報酬かつ自発的な活動

また、次の8つの学習成果を達成することが求められる。

- ・自己認識を行うこと
- ・新しい挑戦に取り組むこと
- ・計画を立て、活動を立ち上げること
- ・他者と協調すること
- ・献身すること
- ・グローバルな観点から課題に取り組むこと
- ・倫理感をもつこと
- ・新しい技能を発達させること

2.4.2 DPの6つのグループと設置科目

DPでは2年間を通して、以下の6つのグループからそれぞれ1科目選択し、3～4科目を上級レベル(HL: Higher Level)、2～3科目を標準レベル(SL: Standard Level)で履修する。HLとSLの配当時間はそれぞれ240時間、150時間となっている。表3にDPで設置される教科・科目の一覧を示した。

表3 DPの教科・科目一覧（文部科学省、(n.d.)より引用）⁸⁾

グループ名	科目名
グループ1 言語と文学(母国語)	言語A: 文学、言語A: 言語と文化、文学と演劇(※)
グループ2 言語習得(外国語)	言語B、初級語学
グループ3 個人と社会	ビジネス、経済、地理、グローバル政治、歴史、心理学、環境システム社会(※)、情報テクノロジーとグローバル社会、哲

	学、社会・文化人類学、世界の宗教
グループ4 理科	生物、化学、物理、デザインテクノロジー、環境システムと社会(※)、コンピュータ科学、スポーツ・運動・健康科学
グループ5 数学	数学スタディーズ、数学SL、数学HL、数学FHL
グループ6 芸術	音楽、美術、ダンス、フィルム、文学と演劇

(※) なお、「文学と演劇」はグループ1と6の横断科目。「環境システムと社会」はグループ3と4の横断科目。また、「世界の宗教」および「スポーツ・運動・健康科学」はSLのみ。

ただし、グループ6は他グループに設置している科目から1科目を選択することができる。例えば、グループ3設置科目「経済」を選択したり、グループ4設置科目「化学」を選択したりといった具合である。大学の学部によっては、入学資格要件として、「DPの理科の科目を2つ履修していること」のようになっている場合がある。そのような場合にはグループ6「芸術」を選択せず、グループ4設置科目を2科目履修することになる。

また、グループ2設置科目を履修せず、グループ1設置科目を2科目履修することもできる。

3. DPの評価方法、ルーブリック評価、指導と評価

3.1 DPの評価方法

DPの評価方法には大きく分けて2種類あり、プログラムの最終段階で評価を実施することとなっている。

①各学校による内部評価 (Internal Assessment, IA)

②IBの試験による外部評価 (External Assessment, EA)

なお、IAでは校内の各科目の担当教員が生徒の取り組みを評価する。例えば、グループ1「言語と文学(母国語)」ではオーラルコメンタリーとよばれる口頭発表を生徒が行い、IBの示す評価規準に従い成績を付ける。IAの評価はIBに送られ、最終的にIBの試験官によって成績が最適化(moderation)される。

一方、EAでは筆記試験が課され(グループ6を除く)、IBの試験官が採点を行う。IAとEAの評価の比

重は教科ごとに異なるが、IA で 20～30%程度（芸術は 50%程度）、EA で 70～80%程度の比率となっている。

また、各教科は 7 段階（7 点満点）で評価が付けられる。ただし、EE と TOK の両方の成績が 3 点まで加算され、合計 45 点が満点となる。なお、DP 取得要件は各科目の点数が 4 点以上かつ合計が 24 点以上と定められている。

以上のように、グローバル人材育成に資するとされる DP は、このような厳格な評価システムにより質が保証されている。すなわち、世界のどこの国・地域でプログラムを履修したとしても信頼性と妥当性のある評価規準で生徒の能力が評価されるのである。

3.2 ルーブリックによる評価

IA と EA の評価で共通していることであるが、IB では、予め用意された評価指標（ルーブリック）で示された評価規準を、事前に生徒に示して授業を進めていく。ルーブリックによって、教師は生徒に身に付けさせたい能力を明確にできる。また生徒は何を目標に努力したら良いのかが分かると同時に、学習の方向性を可視化できる。

以下に、例としてコアの科目の 1 つである TOK の最終試験（Essay）における評価指標（ルーブリック）の一部を示す（表 4）。

表 4 TOK のルーブリック（国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議。（2012, pp. 27-28）より作成）⁹⁾

達成度	観点
0	・レベル 1 に達していない。
1-2	・エッセイ全体にまとまりがなく、構成が不十分である。 ・筆者の意図が分かりにくい。 ・エッセイの論点をサポートするために事実に基づいた情報が使われているが、非常に不明確である。 ・資料や情報はしっかりと認識されておらず、適切な参考文献等にあたっていない。
3-4	・エッセイ全体的にまとまりがなく、構成も不十分である。 ・筆者の意図が伝わりにくい部分がある。 ・使用されている用語について、説明の努

	力は見受けられるが、意味が不明瞭である。 ・エッセイの論点をサポートするために事実に基づいた情報が使われているが、常に信頼のおける内容ではない。 ・資料や情報の一部は適切な方法で使用されているものの、情報が不完全もしくは正確さに欠けている。
5-6	・エッセイ全体のまとまりはよく、構成も適切である。 ・エッセイのコンセプトが適切な形で表されている。 ・必要に応じて、エッセイのコンセプトについて適切な説明がなされている。 ・エッセイの論点をサポートするために使用されている情報は、ほぼ正確である。 ・資料や情報が適切に使用されているものの、正確さに多少欠ける部分がある。 ・制限単語数が守られている。
7-8	・エッセイ全体が良くまとまっており、全体的にしっかりとした構成である ・エッセイのコンセプトが良く考えられている。 ・エッセイのコンセプトについての説明が適切な場所で行われている。 ・エッセイの論点をサポートするために使用されている情報は、正確である。 ・資料や情報が適切に使用され、正確に使用されている。 ・制限単語数が守られている。
9-10	・エッセイ全体が非常に良くまとまっており、全体的に効果の高い構成である。 ・エッセイのコンセプトが良く考えられている。 ・エッセイのコンセプトについての説明が適切な場所で行われている。 ・エッセイの論点をサポートするために使用されている情報は正確である。 ・資料や情報が適切に使用され、正確に使用されている。 ・制限単語数が守られている。

3.3 DP の指導と評価活動

DP では指導と評価の一体化を重視している。指導にあたっては、

①生徒に課題を与え、

②課題について探究させ、

③探究した結果を評価活動の中で示す、

という一連の流れが一般的である。なお、表 5 は DP のコア科目「TOK」の年間指導計画の一部である。図

表5 年間指導計画における指導内容と評価活動例（筆者による作成）

TOPIC	CONTENTS	ALLOCATED TIME	ASSESSMENT INSTRUMENTS TO BE USED	RESOURCES
Areas of knowledge Ethics Focused on reason and emotion (ways of knowing)	- Students will explore ethical belief and culture. - Students will give examples of ethical dilemma. - Students will answer the question “to what extent overcoming ethical dilemma develops our personality?” - Students will reflect their learning through individual presentation..	10 hours	Written assignment: List examples some experienced ethical dilemma. Students argue that how they overcame it. Individual presentation: Students reflect their learnings from a view of transformation of their values and beliefs, what do students acquire new knowledge, what matters could be further discussed or addressed.	Ted Talk. Damon Horowitz: <i>Philosophy in prison</i> . Cohen, A.I. & Wellman, C.H. (2013). <i>Contemporary Debates in Applied Ethics (Contemporary Debates in Philosophy)</i> . Wiley-Blackwell.

中の CONTENTS の欄からは、単元のトピックである倫理 (ethics) について、生徒自身が探究できるような問いかけが行われることが分かる。また、評価活動の計画 (Assessment instruments to be used) の欄からは、指導と評価が一体化し、生徒が授業中に学んだ内容を深化できるような評価活動となっていることが伺える。表5のような指導計画を2年間分作成・実施することがIB教員には求められるが、IB教育についての十分な調査・研究なしには効果的な計画は立てられない。従って、IBの普及・拡大にあたっては大学におけるIB教員養成と並行し、現職の教員に対してもIBの評価手法や指導方法を学び、模擬授業やDP認定校での教育実習等を通して探究型・課題解決型の手法を実践する機会を提供することが不可欠となってくる。

4. 今後の課題

4.1 候補校における課題

DP認定校を目指そうとする学校を「候補校」(candidate school)と呼ぶが、候補校はDP認定校となるために、IBの教育理念や教育手法、評価手法等を十分に理解した上で、年間指導計画の作成や単元の指導計画の作成等を行い、作成した書類一式を国際バカロレア機構に提出する必要がある。一方、国内では、候補校のDPコーディネーター¹⁰⁾や教員はIB教育の経験がない場合があり、認定の取得までのプロセスは、DPコーディネーターや教員にとって大きなハードルであると言える。また、筆者による国内の候補校3校への聞き取り調査の結果、以下の項目について課題であると感じていることが明らかになった。(表6)

表6 DP導入にあたっての課題（上位3位）

1位	IBの評価手法の理解と評価活動の計画・作成を行うこと
2位	探究型学習・課題解決型学習を取り入れた授業を計画し、実施すること
3位	教科・科目の枠を超え、教員同士が協働で調査・研究に取り組むこと

調査結果から、これまで日本の多くの学校で不得意な部分とされていた、指導と評価の一体化や探究型・課題解決型の授業スタイルへの転換が必要であることが明らかになった。表1に示した課題は、国内の認定校等200校達成のための共通課題であると考えられ、DPの教育に将来携わる教員を育成する上でも、重視すべき項目であると言える。

4.2 教員同士による協働調査・研究

IB教育は「リベラルアーツ型学習」¹⁰⁾であるとされ、教科・科目の枠を超えて授業を実施することが求められる。例えば、①歴史の授業で歴史上の人物のスピーチを取り扱い、なぜスピーチが民衆の心を掴んだのかを学び、②歴史の授業と同時期に、英語の授業で説得型スピーチの手法を学び、実際にスピーチを実施する、といった計画を作成することが求められる。これまでの多くの日本の学校では、教科・科目内で生徒の学びが完結し、学んだ知識を実際に教科横断的に活用するところまでは至っていなかったとの指摘もある¹¹⁾。一方、IBの教育では、教科・科目間で十分な連携を行わなければ、学んだ知識を実際に活用できるような効果的な指導が実現できない。特に、候補校では表6で示

す通り、「教科・科目の枠を超えて、調査・研究を行う時間が不可欠」と答えていることから、今後のグローバル人材の育成教育の中でもリベラルアーツ型の教育の中で、教科の専門領域のみに捉われない教員の育成が必要である。

5. 最後に

文部科学省事業評価書（平成24年度）では、「国際バカロレアのカリキュラムや指導方法、評価方法等を研究し、我が国の教育に取り入れていくことは、新学習指導要領が目指す『生きる力』の育成や新成長戦略に掲げられている重要能力・スキルの確実な習得に資するとともに、学習指導要領の見直し等の際に有効な実証的資料となる」¹²⁾としていることから、今後の日本の動向としてIBのエッセンスが教育の中に浸透していくと考えるのが自然である。グローバルに活躍できる人材育成の1つの手段として、IBの教育手法の普及・拡大に期待する。

注

- [1] ATLの5つのスキルの日本語訳は著者による訳である。
- [2] DPコーディネーターとは、プログラムの統括に当たる教師のことで、DPが効果的かつ円滑に実施されるよう、教師の指導等の業務に関わる。なお、DPコーディネーターは国際バカロレア機構の規定により、DP認定校では必置となっている。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省.(2015). 「まち・ひと・しごと創生総合戦略（2015改訂版）. 参照 <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/info/pdf/h27-12-24-siryoku2.pdf>（2016年8月23日閲覧）.
- 2) 内閣官房内閣広報室. (2013). 国際バカロレアについて. 参照 http://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/kokusentoc_wg/hearing_s/250913_kousetuminnei_monkashou_sankou2.pdf（2016年8月23日閲覧）.
- 3) International Baccalaureate. (n.d.). Programmes. 参照 <http://www.ibo.org/en/programmes/>（2016年8月23日閲覧）.
- 4) International Baccalaureate Organization. (2014a). DP：原則から実践へ. Cardiff, UK：International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
- 5) International Baccalaureate Organization. (2014b). 国際バカロレア（IB）の教育とは？. Cardiff, UK：International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
- 6) 文部科学省（2014）. 育成すべき資質・能力を踏まえた

教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—平成26年3月31日. 参照 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/07/22/1346335_02.pdf（2016年6月24日閲覧）.

- 7) International Baccalaureate Organization. (2015). Approaches to teaching and learning in the Diploma Programme. Cardiff, UK：International Baccalaureate Organization (UK) Ltd
- 8) 文部科学省. (n.d.). 3. 国際バカロレアのプログラム 参照 http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1308000.htm（2016年6月24日閲覧）.
- 9) 国際バカロレア・ディプロマプログラムにおける「TOK」に関する調査研究協力者会議. (2012). 国際バカロレア・ディプロマプログラム Theory of Knowledge (TOK) について. 参照 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2012/09/06/1325261_2.pdf（2016年6月24日閲覧）.
- 10) 大迫弘和, 長尾ひろみ, 新井健一, カイト由利子. (2014). 国際バカロレアを知るために. 東京：水王舎
- 11) 文部科学省（2014）. 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—（平成26年3月31日）.
- 12) 文部科学省. (2012). 「文部科学省事業評価書（平成24年度新規・拡充事業等）1-1. グローバル人材育成推進のための初等中等教育の充実等（新規）」. 参照 http://www.mext.go.jp/a_menu/hyouka/kekka/1311777.htm（2016年6月24日閲覧）.

受付日 2016年6月29日、受理日 2016年8月29日